



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第67号

2014年1月7日

社叢学会の充実発展を期待する

NPO法人社叢学会理事長・京都大学名誉教授

上田正昭

新しき年の始めの今日降る雪のいやしけ吉事

周知のように『万葉集』の最後をしめくくる歌である。当時因幡守であった大友家持が、天平宝字3年(759)の正月元旦に因幡の国庁で詠んだ秀歌であり、時に家持は42才であった(没年は68才)。2014年の新春を迎えるにあたって、連年の災害に“いやしけ吉事”の思いが募る

内外の有志が相呼應して京都の賀茂御祖神社の森に集い、内閣府のNPO法人として社叢学会が発足してから、早くも12年目となる。この間、学会の定款第3条に明記するとおり、鎮守の森をはじめとする社寺林などの調査と研究を進め、歴史的・共同体的な自然の森の保全・拡充・創出に尽力してきた。そして社叢インストラクターに養成や鎮守の森を主とする様々な問題に対処してきた。特に2011年の3月11日の午後2時46分には、マグニチュード(M)9.0の大地震が勃発、三陸沖から大津波が押し寄せ、加うるに福島第一原発の事故による放射能汚染という人災が重なって、未曾有の東日本大震災となった。

学会では被災した社叢とその修復にいち早く取り組み、高台の鎮守の森に多くの人々が避難して人命が守られた例や、鎮守の森で復興を祈願して実演された伝統芸能に、被災された方々が多数勇気づけられた例が明らかとなった。鎮守の森が被災地の復興と地域コミュニティの再生に大きく寄

与することの重要性も指摘された。

3・11のおりにすぐ想起したのは、京都大学の学生時代に読んだ、東京大学の物理学の寺田寅彦教授の「日本人の自然観」という論文である。寺田教授は1935年12月31日、57才に若さで亡くなったが、この論文はその年の10月に発表されているから、最晩年の執筆と言ってよい。

そのなかで寺田教授は、日本人は「自然を師として学び、自然自身の太古以来の経験をわが物として自然の環境に適應するようにつとめ」、「母なる土地」が「我々を保育」してきたと指摘する。そして自然と対決し自然を克服して発達してきた「西欧科学の成果を何の骨折りもなしにそっくり継承した日本人」のありようを、「ただ天恵の享樂にのみ夢中になって」、台風・地震・火山の爆発・津波など「巖父」としての「刑罰の鞭」の「回避の方を全然忘れてるようにみえる」と警告されていた。

鎮守の森はカミが宿る聖域としてオソレとツツシミのなかで維持されてきた。いまの現実はずしもそうではない。私自身は膀胱癌の手術を3回も行い、今限りで理事長を退任せざるをえなくなったが、総会後に選任される新理事長を中心とする新体制によって、自然と人間の接点であり共生の場である鎮守の森のあるべき姿を提示して、さらなる充実と発展を目指していただきたい。

平成26年度年次総会

21日(土)に「末の松山」と仙台平野被災社叢の見学を

23日(月)には大杉神社(岩手県)での祈念植樹とリアス式海岸部見学も

6月22日に竹駒神社(岩沼市)で